

ラオスのこども通信

29号
2003年11月発行



- レーちゃんの1日・・・2
- 「よいしょ、よいしょ、よいしょ！」/CCCキャンペーン・・・4
- ヴィエンチャン事務所から/図書配付。南のセコン、北のポケオハ・・・6
- ボランティア掲示板・・・7
- 国内活動、事務所の動き、ラオス語おもしろ話(1)・・・8
- 2003年度の通常総会を開催・・・10
- できたこと、できなかったこと、課題は何？/合宿報告・・・11
- 寄付者・協力者のみなさん<2003年6月～10月>・・・12



セコン県の子どもたち。
この子たちにとってラオス語は母語ではない。(6ページへ)

できたこと、できなかったこと、課題は何？

2001年から3年間の活動計画を立てた中期計画が締めくくりの年となり、その評価のための合宿を9/27(土)・28(日)、平和島ユースセンター(東京・大田区)にて行いました。スタッフ、活動会員、ボランティアなど15名が参加し、意見交換をしました。

合宿は、会の理念を確認することから始め、各プロジェクトについて、当初の計画、実施したこと、投入したお金、成果などについて一覧表を作り、情報を共有し、議論を進めていきました。

3年間を振り返ると、プロジェクトは着実に成果を挙げ、人材(担い手)が育っています。読書推進(図書館・図書袋、学校図書室)や子ども文化センターは、会からの提言がラオス政府に受け入れられ、普及が進みました。

一方、大人から子どもへのプログラムの提供という従来の取り組みの姿勢でなく、子どもの参加とい

う視点が、私たち自身不十分だと気づきました。

事務局運営については、自己資金の強化ができず、厳しい状態にあることを再認識しました。

この3年間をどう評価し、次の中期計画を組み立てるかをめぐっては、「評価指標を明確にすべきだ」「世の数値的評価にふりまわされなくてよい」「組織運営は資金集めだ」「本が原点だ」「子ども文化センターが核だ」「ラオスの子どもたちのことをわかっていない」「体力相応の仕事をするべきだ」と意見が出ています。現在、さらに議論を進めています。

◆プロジェクト◆

<めざしたこと>

【出版】本づくりのノウハウ確立

【紙芝居】普及していくこと

【読書推進】読書の定着。持続可能な体制作り。行政への働きかけ

【子ども文化センター】子どもの居場所。自己表現・実現。子どもを守るシェルター。持続可能な体制作り

【調査】子どもと子どもを取り巻く環境の把握

<できたこと>

【出版】3年間で20タイトル出版。コンクールを実施。編集の態勢がある程度整い、作家、作品が多様になった。

【紙芝居】他NGOの保健教育の紙芝居や地元団体との普及のための連携が進む。コンクールに小学生から大人まで幅広く参加。ラオス人が執筆した『紙芝居ハンドブック』を出版。担い手が育つ。

【読書推進】図書館・図書袋は02年12月よりJICAとの開発パートナー事業。学校図書室、03年度6月末97か所。会からラオス政府に働きかけ、研修は学校だけでなく、各県の教育

監督官、教員養成校の学生、さらに「人材を育てる人材を育てる」方向へ進展。研修用テキストも作成。会で活動するラオス人作家が教育省の読書教育アドバイザーとなる。

【子ども文化センター】支援先が4か所から6か所に増加。会の支援なしに各地で次々開設。ラオス政府も全国化に意欲。プログラムは多彩になり、高校生ボランティアも参加。子どもたちがプログラムのあり方などに関わる。子どもの権利についての取り組みが始まっている。

【調査】調査の仕方をさぐる事前調査を実施。

<できなかったこと>

【出版】予定した3作品の出版。出版委員会体制の確立。手作り絵本運動。作家志望者向けの多彩な作品紹介

【紙芝居】手作り紙芝居の普及。街頭紙芝居。作品の出版。子ども文化センターの外への広がり

【読書推進】書店経営。つづり方コンクール

【子ども文化センター】運営の自立化

【調査】本格調査

<課題>

プロジェクトへの子どもの視点。会として子どもについての専門能力。出版など同種の事業を行う団体間の調整

◆組織運営◆

【東京事務所】

<できたこと>

法人化。ラオス事務所との意思疎通の強化。ボランティアによるイベント運営

<できなかったこと>

自己資金率の目標50%が、実績は01年26%、02年35%。支援者数が年10%増の延べ900人を目指したが、00年846人、01年675人、02年591人と減少。事務局長の専従化(常駐化は実現)。

<課題>資金作り。体制強化。事務局スタッフの業務過重からの脱出。

【ラオス事務所】自立化(資金調達、事業の企画運営)をめざす。徐々に進んでいるが、リーダー以外の人材が弱い。力量のある人材の確保に苦心

●家族と

日中家族は田畑へ出かけるので、妹と二人でお留守番をすることが少なくありません。そのため、レーちゃんは、家の仕事を一通りこなすことができます。妹もレーちゃんを見習いながら、一緒に手伝いをしてくれますが、まだまだ足手まといで、文句を言いたくなることもあります。空き時間には、二人でごろごろしたり、木の実でおはじきをしたり、つる草を織ったりして遊んでいます。レーちゃんは、お母さんに教えてもらった刺繍も得意で、集中しているとすぐに時間がたってしまいます。

●学校・友人と

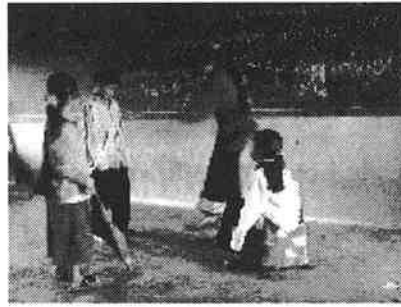
ふだんは気の合うごく少数の友だちと過ごしています。成績が優秀で、先生によく褒めてもらうだけでなく、学内で1、2を争うきれいな子だと噂されています。そのためレーちゃんに憧れている友だちはたくさんだそうです。頼まれて、友だちに勉強を教えることもあります。

●遊びについて

好きな遊びは、2種類あるようです。1つは遊びらしい遊びとも言える、お絵描きや追いかけっこなどです。男の子だと、サッカーや鬼ごっこなどを楽しめます。もう1つは、遊びとは認識されにくい遊びですが、ぼんやりしたり、ふざけっこをしたりと、くつろいだ時間を過ごすのが好まれます。いずれにしても、気の合う仲間が必ず一緒でした。

遊び相手に関して言えば、これまで私が見てきた限りでは、レーちゃんくらいの年齢の子どもは、弟妹など年下の子と遊ぶ割合が圧倒的多数でした。これがそのまま子守りとなっているケースも多いです。でも、本人達自身が子守りをしている／させられているという意識をしているというよりは、遊びそのものが偶然子守りになっていただけ、というように、境界が曖昧である様子がうかがえます。

また、レーちゃんが住んでいるような農村部では、村全体が1つの家のようにあり、村中が子どもにとっての遊び場になっていました。



学校で

●本は読んでいる？

教科書の朗読をしたり、時には学校から借りた読み物を読むこともあります。レーちゃんが、借りた本を家に持ち帰ると、妹や近所のお姉ちゃんが必ずと言っていいほど覗きにきて、一緒に楽しめます。

●まとめて代えて——絵本を切り口に

レーちゃんの生活をご紹介しましたが、彼女を含むラオスの子ども達の生活を観ていると、日々の生活を上手に楽しんでいる様子がいつも伝わってきます。一緒に暮らしてきた多くの子どもにとって、学校は遠く、長めの昼休みを学校で過ごす子もたくさんいました。そのような学校での「空き時間」に、例えば絵本があれば、子ども達が選ぶ楽しみの一つとなるように思えます。

また、絵本を中心に、皆で楽しく語り合ったり、子ども達自身がそこからストーリーを展開している場面も観られました。子どもが学校から持ち帰る絵本が、地域の結びつきを深めているような側面を感じています。今後も、子どもが自由に想像力を膨らませられるような絵本が提供されていくことを、ラオスの子どもの生活に参与した者の一人として望んでいます。

(平間信恵／大阪大学大学院人間科学研究科)

編集部より：

平間さんは、ラオスで2003年3月まで、子ども達と生活をともにしながら観察をする「参与観察」を行ってきました。今回の原稿は、それに基づいて、まとめていただきました。

なお、レーちゃんはプライバシー保護のため仮名としています。

「よいしょ、よいしょ、よいしょ！」



●日曜日は大盛況

子どもたちが、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さんに連れられて、お弁当持参でやってくる。先生たちも沢山やってくる。工作の先生、歌の先生、紙芝居を読み聞かせする先生、踊りの先生、そして絵画の先生。日曜日のヴィエンチャン子ども文化センター(CCC:Children's Cultural Center)は大盛況だ。

どの先生も優しく、怒ったりしない。だから子どもたちも、好きなものだけ参加すればいい。舞台上で眠そうにしている子どももいれば、活発に活動する子どももいる。自由気ままでいいのだ。

そんな子どもたちに大人気なのが、兄貴分のアナチャック君。彼は歌と踊りが大好き！彼が踊ると子どももつられて踊りだす。そして「大きなかぶ」を読めば、たちまち隣におじいさん、おばあさん、孫、いぬ、ねこ、ねずみになりきった子どもたちが、本をひっぱる。

「よいしょ、よいしょ、よいしょ！」

子どもたちは、しっかり絵本の世界で遊んでいる。絵本が子どもたちに受け入れられているのを、目の当たりにする。そしてアナチャック君と一緒に、みんなの兄貴分になりつつある男の子がいる。本好きの彼は、子ども文化センターにある本を全部読んだそうだ。当時は絵を教えてもらう側であり、紙芝居の聞き手であった彼が、今は「絵を描いて」と

せがまれる立場になり、読み手になっている。

●平日に見せるもうひとつの顔

イーアンちゃんがやってくる。以前も『ラオスのこども通信』で紹介されたが、彼女は少数民族モン族の女の子。学校には行かず、物乞いをしている。そしてもらったお金が少ないと、親に怒られるのだ。

彼女は絵本が好き。その日もアナチャック君に読み聞かせをせがんでいた。そして書き方練習帳で、ラオス語の書き方をなぞって覚えている。一緒にくる男の子ははずかしがりやで、スタッフともあまりお話ししない。だからラオス語が、なかなか覚えられない。ここに地域での子ども文化センターの役割を、ひとつ見つけた。

●これからの子ども文化センター ＜卒業した子どもたちに＞

子ども文化センターを「卒業」した子どもたちは、どこに行くのか。小さい子どもたちの姉さん、兄さん、リーダーとして関わっていきけるのだ。子ども文化センターは、そうした「卒業生」にとっても良い居場所となっている。これはとても大切なことだ。

首都ヴィエンチャンの都市化の勢いには凄まじいものがある。青年たちの麻薬や売春、AIDSなどの問題もよく耳にした。卒業した年齢の子にとって

子ども文化センター 来館者数

	平日	土日
ポリカムサイ	80	100
サイヤプリ	150	200
ルアンパバン	80	100
ヴィエンチャン	50	65
ゲンタオ	-	35
シーサタナーク	35	65

身近な問題だろう。これらの問題から遠ざける場となり得るのが子ども文化センターではないか。また、AIDSなどの正しい知識を身につけるための取り組みも必要となるだろう。

<子どもの声を>

子ども参画（＝運営）の仕組みづくりは、子ども文化センターの今日の課題となっている。しかし、どうしたら実現できるのか。

私はNGO能力強化のインターンとしてラオスに滞在した。その間、子どもや青年の力を前よりずっと信じるようになった。まずは、子どもたちが意見を言い合う、交換し合うきっかけを作ることから始めたらどうか。そのために、しばらくは大人の継続した働きかけ、導きが必要だろうと思う。

（久留雅美／「南」の子ども支援NGO能力強化5ヶ年計画プログラム、インターン）

CCCキャンペーン♪

ラオス各地に広げる推進力に 日本から、子ども文化センターを応援してください！

子ども文化センター（CCC）は、学校では機会をえられにくい図画工作、音楽、伝統文化などに触れ、のびのびと遊べるラオス初の子ども向け施設として、1994年に誕生。会は、その発案から関わり、支援を続けてきました。現在は6か所を支援しています。

今や、自力で開設する子ども文化センターも次々と登場し、現在13県、19か所で活動が行われています。そして将来は18県すべてに広げ、さらに郡の単位で設け、各地域の子どもたちに提供していこう、という声が強まっています。

01年に行われた子ども文化センター全国会議（館長、講師、情報文化省の担当者、アドバイザーが参加）では、将来自分たちの力で運営ができるよう、独自の資金づくりの方法を模索しようという方向性を打ち出しました。現在、そのための試行錯誤の最中で、突然、支援を打ちきめることはできません。

生まれて間もないシーサタナーク子ども文化センターのスタッフから、

「小さいCCCなので支援がなくなったら、どうやって続けられるかとても心配です。私はこの仕事が好きです。命をかけて活動を続けるよう努力します」という発言があり、同様の意見が相次ぎました。

現在、約70万円が不足！

「ラオスのこども」の今年度(03年7月～)CCC予算2万ドルのうち30%、日本円にして約70万円がまだ集まっていません。

そこで、みなさまに、お願いしたいのです。子ども文化センターの活動が、ラオスに根をおろすまで、支えていただけないでしょうか。

指定募金でご支援を！

「指定募金」12,000円で、ひとつの講座を週1回、3か月間続けることができます。毎週、教室からあふれてしまうくらい、たくさん子どもたちがクラスを楽しみに、CCCに通ってきています。

みなさまの暖かいご支援を心よりお待ちしております。

郵便振替口座が
新しくなりました。

口座番号：00140-6-462494
加入者名：ラオスのこども

*通信欄に指定募金(CCC)とお書きください。よろしくお願いたします。

図書配付。南のセコン、北のボケオへ

いつもは新しい図書を受け取った先生方の緊張と熱気が伝わってきて講師も元気づけられます。でも、セコン県でのセミナーでは様子がちょっと違います。そのわけは――。



学校を卒業しただけで先生になった方も多く、応用力が不足しているためです。また、セミナーではラオス語の歌を紹介していますが、教室では民族の歌も取り入れて子どもたちの緊張を和らげるよう伝えることも必要でしょう。今回のセミナーは、講師の能力向上について考えるよい機会になりました。

●船と徒歩で2日かけて

セコン県もボケオ県も、交通事情はよくありません。セコン県では、ベトナム国境近くの村から3日間歩いて会場まで来た、という先生方がいました。ボケオ県の山地に住む先生は、船と徒歩で2日かけて村に戻るとのこと。本は先生とともに長い道のりを移動して学校に届けられます。しかし学校に本が届くことは初めの一步。重要なのは多くの子どもたちが本に関心を持つよう、先生が働きかけること、さらに重要なのはこの活動を持続していくことです。

今年2月より58校で実施している読書環境調査を通して、読書推進活動を持続するにあたってのさまざまな課題が浮かび上がってきました。

担任としての仕事の多さ、給与が低く遅配が続くための生活の厳しさなど、熱意だけでは読書推進活動を担うことは難しいものがあります。学校に本を持ち帰った後、先生はどれだけ図書利用に携わる余裕があるだろうか、周りの先生方にノウハウは引き継がれるだろうか、親が読書について理解してくれるだろうか。

学校までの長い道のりに、読書推進の道のりが重なって見えました。そんな中で先生を支えてくれるのは、子どもたちの読書への意欲でしょう。セミナー最終日には実習校で子どもたちを相手に読書推進活動や図書管理の実習を行います。新しい本を手にした子どもたちは、小さな指で文字を追いつながりながら一字一字声を出して読んでいました。それは自分の世界を一步ずつ切り開いていくように聞こえました。そんな子どもたちの姿は先生の心にも焼き付いていることでしょう。

「これから学校に戻ります。ありがとうございます」という先生に、そんな思いを託して答えました。「ソークディー（お元気で、頑張って）」

●ラオス語、民族のことば

「いま説明したばかりなのに・・・」

図書の登録、貸出し手続など図書管理について繰り返し説明しても、理解できない先生が少なからずいました。ラオス語を母語としない先生方は、講師の説明についていけなかったようです。

講師たちの嘆きを聞いて、前日に訪問した小学校での情景が浮かんできました。

生徒全員が少数民族で、子どもたちは恐る恐る私たちを取り囲みましたが、話しかけると逃げていきます。歌やお遊戯を教えてあげると、数歩先からためらいがちな微笑が返ってきますが、手招きするとまた距離が開いて、ということを繰り返し、ついに子どもたちの声を聞くことはできませんでした。

最近赴任してきたラオス語を母語とする先生は、民族のことばを学びながらラオス語と組み合わせる授業をしているとのこと。ラオス語が通じないのは子どもだけではなく。市内のある職場では、異なる民族出身のスタッフ同士が筆談で話すこともあるそうです。先生も同様と思い、講師に、見本を示せば容易に理解してもらえるだろう、と助言しました。

セミナーでは、講師は先生方の様々な条件に柔軟に対応して、先生が内容を理解できるよう教え方を工夫することが求められます。セミナーを受講したことがあるかどうかはもちろん、年齢や学歴も考慮しなければなりません。中高年の先生の中には、小

■図書配付

10月27～31日
セコン県
図書箱50校
図書袋20校

11月6～9日
ボケオ県
図書箱111校
図書袋39校

■読書推進セミナー

各校1名の図書担当
の先生が参加

ボランティア掲示板

次は、あなたが！

ボランティアを初めて体験。 今やイベントの呼び込みが 自分の仕事に？

初めて参加した麻布十番祭りには、自分と同じような学生から社会人の方、地域の方々、さらにはラオスからの留学生など、様々な方たちがボランティアとして参加されていました。

自分はボランティアに参加するということが初めてだったため、何をすればよいのかと少し不安でした。午前9時から午後3時まで、イベント会場から離れた大田区の公民館の調理室で販売用のコーヒーを淹れたり、春巻きの皮を巻いたりしました。その傍ら他のボランティアの方たちとお互いにラオスやラオス以外の諸々のことについて情報交換したり、また東京外国語大学のラオス語専攻の学生やラオスの留学生たちと友達になれたり、とてもアットホームな雰囲気の中で作業を進めました。

その後、販売の手伝いをするため麻布の公園の会場に移動したのですが、夏休み中ということもあり浴衣姿の女性や親子連れで、会場は通勤ラッシュの駅のホームのようにごった返っていて、会のテントに辿り着くのも一苦労でした。またテントの中も作業中のボランティアの方々で一杯のため、自分はテントの外で料理の宣伝のために呼び込みをすることになりました。声が大きいからでしょうか、これ以降参加した日比谷や横浜のイベントでも毎回呼び込みをするのが自分の仕事(?)となったようでした。

このように何度かイベント、その他の活動に参加させていただく中で、ボランティア・国際協力というのは今まで遠く存在でしかなかったのが、やる気さえあれば誰でもこういった形でできるんだということを実感しました。

自分は元々ただ単にラオスという国に興味があり、ボランティアに参加するというより、この会に参加することでラオスの情報を得ようと思っていました。ところが実際に参加してみると、自分の求めていた情報を得られたりボランティアをすることだけに止まらず、他の方々と情報交換・交流によって多くの色々な知識・経験が得られ、自分にとっても大変有意義な時間を過ごすことができました。自分はまだまだボランティアとしては初心者ではありますが、自分がやっていることがすこしでもラオスの子どもたちのためになるのなら、できる範囲でこれからも協力していきます。
(脇田俊文/学生)

意外！ アパートの小さな事務所だった。

大学で、インターンの授業を取り、「ラオスのこども」に came ました。インターン中に行ったことは大きく分けて2つで、事務所での作業とイベントです。

初めて事務所に行った日、アパートにある小さな存在が意外でしたが、今では事務所のアットホームな雰囲気が好きです。それとは裏腹に、仕事はやってもやっても終わりがありません。最初は、コピーのとり方、イベント準備のやり方、お茶の時間と何でも新鮮でした。

やっていて感じたことは、お金が大事だ！ということです。資金不足でラオスでの運営が困難になったり、新しく広げようとしてもできないという状況はもどかしいです。(ラオスでの資金調達力や自立を高めることも大事ですが)東京事務所では、イベントに参加したり雑誌に取り上げてもらい、「ラオスのこども」の活動を広め、賛同して下さる方を増やしたいという思いが伝わってきました。

印象に残っていることは、麻布十番祭りです。初日は、朝9時から夜10時まで馬込文化センターで料理を作りました。「大量だよ」と聞いていたにもかかわらず、材料の多さに驚きました。おもしろかったのは、ミーカティのスープに使われた豚骨で、人の骨をグツグツ煮込んでるんじゃないのか、魔女がスープを作ってるんじゃないかと想像が膨らむほど大きかったです。麻布十番祭りは、他のイベントに比べ、わいわいがやがやどころか戦場だし、疲れるけど楽しい、やりがいがあります。楽しいと思えるのは私にまだまだ余裕があるからでしょうか。企業からのボランティアの方やラオスの留学生が多く、今までに自分の周りにいなかった方と交流できたのは、いい機会でした。そして、毎日ミーカティを食べても飽きなかったラオス漬けの3日間は、私の夏の思い出です。

インターンを終了してボランティアになってからの方が、慣れてきたせいか、会や事務所での活動、メンバーと近くなれた気がします。せっかくですので、もっと極めたいです。
(戸崎綾乃/学生)



●ラオス語絵本づくりイベント(沖電気工業株式会社) 7/5
「ラオス語絵本をつくってラオスの子どもたちに送ろう!」というこのイベントは、今年で4回目になります。OKIグループの社員・OB・家族、そして会の関係者、合計20名が参加しました。まず、共同代表のチャンタソンが、50分程度、1982年に絵本を日本から送ることから始めた会の活動から、90年代はじめにラオスで絵本を出版するにいたったいきさつ、現在の活動の話をしました。その後、ラオスで子どもたちが届けられた絵本を読んでいる様子などをビデオで見ながら、ラオスコーヒー、レモングラスティー、黒米のデザートで休憩をとりました。いよいよ、参加者が、ページ数の多いものから、少ないものまで、いろいろな絵本づくりに挑戦、ローマ字で自分の名前を書いた紙を、裏表紙の裏側に貼って完成です。1時間ほどで、瞬く間に用意した30冊分の絵本すべてがラオス語絵本になりました。



●ワールドカルチャーキャラバン(主催:アサヒビール株式会社・キッコマン株式会社) 7/9
NGO4団体が「食」を通じて、国際協力の活動を紹介するイベントで、当会は、7月に開催しました。26名のアサヒビールとキッコマンの社員が参加しました。まず、キッコマンのキッチンで、共同代表のチャンタソンが、ラオス風揚げ春巻き、たけのこと鶏肉のココナツカレー(ラオスのそうめんにかけて)、ココナツミルクゼリーの料理のデモンストレーションをしました。途中、2名の男性の参加者の方に、実際に春巻きを巻いてみるボランティア体験をしていただき、会場が大変盛り上がりしました。その後、社員の皆さまに試食をしていただきながら、司会の小川が、ラオスの食文化や、当会の活動の紹介をいたしました。



●麻布十番納涼祭り・国際バザール 8/22-24
港区一の橋親水公園で3日間、屋台で、ミーカティー、揚げ春巻き、ハーブ風味鶏唐揚げ、アイスコーヒーを販売しました。コップ、持ち帰り袋、ボランティア用飲料をアサヒビール株式会社にご支援いただきました。総勢67名のボランティアの方々に、調理と会場での販売をご協力いただきました。留学生も14名が参加し、ラオス料理に腕をふるいました。今年は、大和証券グループの社員、学生、地元の大田区在住者など、大勢の方々に、初めてボランティアをしていただいたのが特徴です。ご協力、ありがとうございました。



●国際協力フェスティバル(日比谷公園) 10/4-5
国際協力に携わる政府機関、国際協力市民団体(NGO)、国際機関、在京大使館など、約200団体の活動を紹介するイベント。当会の教育ブースでは、「ラオス語で名前を書いてみませんか?」と「ラオスクイズに挑戦してレモングラスティーの無料券をもらおう!」というちょっとした仕掛けをしました。また、食ブースでは、ハーブ風味鶏唐揚げとレモングラスティーを販売しました。小ホールでは、小1時間、「子どもたちが作った紙芝居」というイベントを行い、代表の森の説明の合間に、留学生のスリデートくんが、少し緊張気味に、初めて紙芝居を読むのに挑戦しました。(ボランティア参加24名、うち留学生6名)



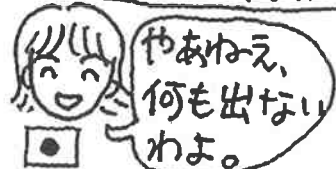
●国際ボランティア貯金フェスタ 10/18

開発途上地域の現状を説明し、国際ボランティア貯金を普及させるために、池袋のサンシャインシティ噴水広場にて、普通の通行客の方々にアピールする新しい試みとして、行なわれました。当会からは、共同代表の森が、ラオスの絵本をつめ、リュック型にした図書袋を背負って登場、活動報告のトークライブをしました。また、留学生の paran、ピーが、ラオスの伝統舞踊を2曲披露し、人気を呼びました。

ラオス語 おもしろ言語

ボランティア仲間や留学生の①
ウイエンシーさんからラオス語を教わっています。
その中で、日本と違っておもしろい、妙に似ている
おもしろい、ようなことをご紹介いたします。①

「きょうのあなた、ステキよ!」と言われたい
ムーニー、チャオ、ンガム、ノ!



発想は似ているけど (ありがたね、何食べたいの?)
ピミョーにちがいますよ。

◆東京事務所の動き◆

- 6/8 6月運営会議
- 6/19 東海市立加古屋中学修学旅行生受入
- 7/5 沖電気工業 ラオス語絵本づくりイベント
- 7/9 ワールドカルチャーキャラバン
- 7/13 7月運営会議
- 8/1 編集担当者座談会 (JANIC)
- 8/3 麻布祭りボランティア説明会&留学生交流会
- 8/10 8月運営会議
- 8/17 通常総会
- 8/22—24 麻布十番納涼祭り・国際バザール
- 9/10—12 大田区梅田小学校、ラオスの子どもの絵展示
- 9/14 9月運営会議
- 9/20 絵本づくりボランティア体験と活動説明会
- 9/27—28 中期計画評価のための秋の合宿
- 10/1 大阪・堺女性大学でチャンタソン講演
- 10/4—5 国際協力フェスティバル
- 10/7 鳩ヶ谷市里中学校生訪問学習受入
- 10/11—12 ワールドフェスタ・ヨコハマ
- 10/18 国際ボランティア貯金フェスタ in 池袋
- 10/18 ワールドカルチャーキャラバン (湯布院)
- 10/30 さいたま市立大谷中学校訪問学習受入

◆ヴィエンチャン事務所の動き◆

- 6/10—12 子ども文化センター全国会議
- 8/2—3 JICA 教師海外研修一行訪問受入
- 8/4—9 教員養成校読書推進講師養成セミナー
- 8/21—22 筑波大学村田教授一行受入
- 8/22 常葉学園大学教育学部一行受入
- 8/25—30 タイ出版研修
- 9/5—6 一ツ橋大生グループ受入
- 10/16 学校図書室 HA89 開設 (ヴィエンチャン市)
- 10/26—30 セコン県読書環境調査、配付とセミナー
- 10/31 学校図書室 HA93 開設(セコン少数民族学校)

国内での活動に、ぜひご参加ください!

- ボランティア活動日** 毎週土曜 (第2土曜をのぞく)
午後1時~5時、東京事務所で行っています。
- 活動説明会** 原則として、奇数月第1土曜に、
ボランティア活動とあわせて行います。
- 絵本2000冊運動** 家庭で、学校で、職場でいかがですか?
- 書き損じハガキ・キャンペーン** 年賀状のシーズンに、
書き損じハガキを集めて、活動を支えてください。
- 運営会議** 毎月第2日曜。ボランティアの方も参加できます。

参加ご希望の方は、事務所まで、お問い合わせください。

2003年度の通常総会を開催

8月17日、特定非営利活動法人ラオスのこどもの通常総会が、ライフコミュニティ西馬込にて行われ、27人が出席（活動会員23名、賛助会員4名）、委任状3名、書面評決3名でした。

<活動会員、賛助会員の 入会方法>

●活動会員は、年間の会費として1500円を頂き、毎年更新します。会費は、ボランティア保険加入費と通信費として使わせていただきます。事務局に、入会申込書をご請求の上、申込書に必要事項を記入して、お申し込みください。

●賛助会員に会費はありません。ご寄付、ボランティアなど何らかの形でご協力くださった方が賛助会員です。ご寄付をいただいた際に、賛助会員として登録させていただきますが、登録をご希望されない方は、郵便振込用紙にその旨ご記入ください。また、ご寄付という形以外で、賛助会員への登録をご希望される方は、事務局まで入会申込書をご請求ください。

<ラオスのこども 役員>

・共同代表・

チャンタソンインタヴァン
森 透

・理事・

小川直美
風間美苗
塩谷 光
野口朝夫

・監事・

野口賢一
森 千也

■会員の登録

法人化とともに会員制度を設け、総会開催にあたって、登録受付をしました。

総会での議決権をもつのが活動会員（法人制度という社員）で、活動や運営の意思決定に参加しようという人向けです。また、会を支援するが議決権はoirないという方に、賛助会員を設けました。

法人制度の便宜上2種類としましたが、そもそも会の趣旨は「みんなでつくっていこう」ですから、どちらも毎月行われている運営会議への参加や意見を述べるすることができます。

■総会開始

第1期（03年5月8日～6月30日）の事業報告案、会計報告案を審議。この期は2か月足らずで、本部機能をラオスに移す話などがされ、承認されました。

会計は、「ラオス情報文化省との資金面での連携はどうなっているか」との質問に、「ラオス外務省と3年間の予算と計画を記載した覚書（MOU）を締結している。情報文化省のもとに読書推進事業を行う国立図書館と子ども文化センターがあり、共同でプロジェクトを進めている。会は子ども文化センターの職員の給料、地方でセミナーを開く際の日当を払っている」と回答。会計報告案は承認されました。

■理事、監事の承認

理事会で選任された理事を総会で承認します。理事候補から、「活動の質を高めることをお手伝いしたい」（野口朝夫）、「わかりやすく、データを早く出せるようにしたい」（風間美苗）、「元気がでる活動にしたい」（小川直美）、「多くの人の意見を反映し、活動に参加する人を増やせたらと思う」（塩谷 光）などの表明があり、承認されました。監事は元事務局長の森千也と野口賢一の選任が承認されました。

続いて、ASPB ラオスの子どもに絵本を送る会からラオスのこどもへの事業継承に関する事項が承認されました。

第2期（03年7月1日～04年6月30日）事業計画と収支予算の報告は、法人化を期に責任を明確化し、次期中期計画では評価指標をとりいれたい、予算はJICAとの連携事業で大きくなったが、運営自体は楽にならないと報告されました。

■プロジェクトの評価をめぐる議論

次期中期計画を立てるにあたって、事業評価をどう考えるか、以下のような議論をしました。

「成果をどう示すか、容易なことではない」

「子どもの現状把握なしに、指標が設定できるのか」
「評価や指標など、がんじがらめにすると、足かせになる」

「数値だけ見ても、子どもは見えてこない。子どもがどう変わったかということが重要。視聴率とは違う」
「子どもがCCCでどう変わって楽しんだか、会のメンバーに伝わるようにしてほしいと思う」

「評価は、自分たちの力のかげどころがどこかを見る意味や、支援者に、お金をどう使ったか、説明する意味がある。支援者は何で判断するか。子どもの顔なのか、数値か。たぶんどちらもだ」

「これまで、数値の部分が弱かった。そこも見なければ、という時期にきたのだろう」

■会としての意見表明をめぐる議論

これまで会では、アフガニスタン、イラクへの空爆反対など世界情勢の動きに対して社会に向けて意見表明してきました。しかし、その是非について、広く議論する機会をもってきませんでした。そこで、総会参加者のみなさんと意見交換をし、次のような意見が出されました。

- ・活動自体が一つの意見表明。社会への意見表明はしてよい。教育に関わるとは、そういうことだ。
- ・団体の目的とは違うから、すべきでない。
- ・定款の「目的」はラオスに限定していない。
- ・自分たちの活動分野でなければ、判断するに必要な情報も、専門性もない。
- ・団体として賛同を求められる場合、名前を貸すような、名前を並べるだけのものならばしないほうがいい。
- ・ラオスに関わること、会の活動に関わることならば発言すべき。
- ・いろいろな意見の人が関わるのがNGOだから、意見が違うので参加できないということはない。
- ・会としてのガイドラインがあったほうがいい。

今後、会としては、どんなことでも発言するというのではなく、ラオスに関することなど活動領域において、必要に応じて発言をしていくという方向で考えていきます。

できたこと、できなかったこと、課題は何？

2001年から3年間の活動計画を立てた中期計画が締めくくりの年となり、その評価のための合宿を9/27(土)・28(日)、平和島ユースセンター(東京・大田区)にて行いました。スタッフ、活動会員、ボランティアなど15名が参加し、意見交換をしました。

合宿は、会の理念を確認することから始め、各プロジェクトについて、当初の計画、実施したこと、投入したお金、成果などについて一覧表を作り、情報を共有し、議論を進めていきました。

3年間を振り返ると、プロジェクトは着実に成果を挙げ、人材(担い手)が育っています。読書推進(図書箱・図書袋、学校図書室)や子ども文化センターは、会からの提言がラオス政府に受け入れられ、普及が進みました。

一方、大人から子どもへのプログラムの提供という従来の取り組みの姿勢でなく、子どもの参加とい

う視点が、私たち自身不十分だと気づきました。

事務局運営については、自己資金の強化ができて、厳しい状態にあることを再認識しました。

この3年間をどう評価し、次の中期計画を組み立てるかをめぐっては、「評価指標を明確にすべきだ」「世の数値的評価にふりまわされなくてよい」「組織運営は資金集めだ」「本が原点だ」「子ども文化センターが核だ」「ラオスの子どもたちのことをわかっていない」「体力相応の仕事をするべきだ」と意見が出ています。現在、さらに議論を進めています。

◆プロジェクト◆

<めざしたこと>

【出版】本づくりのノウハウ確立

【紙芝居】普及していくこと

【読書推進】読書の定着。持続可能な体制作り。行政への働きかけ

【子ども文化センター】子どもの居場所。自己表現・実現。子どもを守るシェルター。持続可能な体制作り

【調査】子どもと子どもを取り巻く環境の把握

<できたこと>

【出版】3年間で20タイトル出版。コンクールを実施。編集の態勢がある程度整い、作家、作品が多様になった。

【紙芝居】他NGOの保健教育の紙芝居や地元団体との普及のための連携が進む。コンクールに小学生から大人まで幅広く参加。ラオス人が執筆した『紙芝居ハンドブック』を出版。担い手が育つ。

【読書推進】図書箱・図書袋は02年12月よりJICAとの開発パートナー事業。学校図書室、03年度6月末97か所。会からラオス政府に働きかけ、研修は学校だけでなく、各県の教育

監督官、教員養成校の学生、さらに「人材を育てる人材を育てる」方向へ進展。研修用テキストも作成。会で活動するラオス人作家が教育省の読書教育アドバイザーとなる。

【子ども文化センター】支援先が4か所から6か所に増加。会の支援なしに各地で次々開設。ラオス政府も全国化に意欲。プログラムは多彩になり、高校生ボランティアも参加。子どもたちがプログラムのあり方などに関わる。子どもの権利についての取り組みが始まっている。

【調査】調査の仕方をさぐる事前調査を実施。

<できなかったこと>

【出版】予定した3作品の出版。出版委員会体制の確立。手作り絵本運動。作家志望者向けの多彩な作品紹介

【紙芝居】手作り紙芝居の普及。街頭紙芝居。作品の出版。子ども文化センターの外への広がり

【読書推進】書店経営。つづり方コンクール

【子ども文化センター】運営の自立化

【調査】本格調査

<課題>

プロジェクトへの子どもの視点。会として子どもについての専門能力。出版など同種の事業を行う団体間の調整

◆組織運営◆

【東京事務所】

<できたこと>

法人化。ラオス事務所との意思疎通の強化。ボランティアによるイベント運営

<できなかったこと>

自己資金率の目標50%が、実績は01年26%、02年35%。支援者数が年10%増の延べ900人を目指したが、00年846人、01年675人、02年591人と減少。事務局長の専従化(常駐化は実現)。

<課題>資金作り。体制強化。事務局スタッフの業務過重からの脱出。

【ラオス事務所】自立化(資金調達、事業の企画運営)をめざす。徐々に進んでいるが、リーダー以外の人材が弱い。力量のある人材の確保に苦心